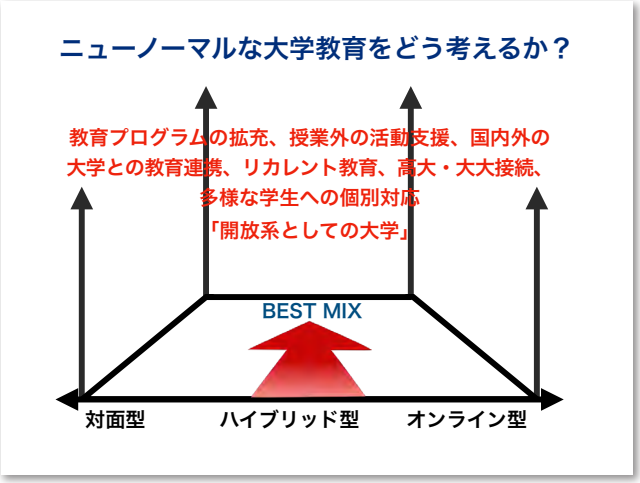
2. 全学教育シンポジウム
「京都大学の教育におけるニューノーマルを展望する」

概　要

9月11日、教職員349名の参加を得て、第24回全学教育シンポジウム「京都大学の教育におけるニューノーマルを展望する」をオンラインにて開催しました。

本学では、1996年以来、毎年、全学教育シンポジウムを開催し、教養・共通教育や大学評価など、様々な教育課題を取り上げてきました。そうした中で、今年度は、2020年初頭からの新型コロナウィルス感染症の拡大に伴い、世界中の大学がオンライン授業を展開する、という未曾有の状況に対応することが求められました。さらに、キャンパスでの対面活動が制約され、授業内外の様々な教育・学習活動や国内外の学生の移動、留学生の行き来等が大きく停滞するという問題から、本学でも全学的な教育支援体制の構築、学生に対する経済的・心理的なサポート体制についても考える必要が出てきました。

そこで、今年度は、「京都大学の教育におけるニューノーマルを展望する」と題し、今後の本学の「より柔軟で強靱」な教育のあり方や、今後本学で自主的・自発的に進めるべき教育改革・改善の取り組みの方向性や目的等について、多様な観点から議論することを目指しました。



テーマ3（ニューノーマルのベストミックス：飯吉先生）

プログラム

午前の部では、本学の教育の現状や方向性をコロナ後も見据えて論じた北野正雄教育担当理事・副学長（当時、以下同）の基調講演「京都大学の教育の課題と可能性：コロナ禍を踏まえて」に続けて、各部局のオンライン教育やオンライン授業支援の取り組み（工学研究科、教育学研究科、国際高等教育院、情報環境機構、高等教育研究開発推進センター）について、それぞれのリーダーにご報告いただきました。

午後の部は、今回のコロナ禍とそこでの教育の意味を人類史的視点から捉えた山極壽一総長（当時）による基調講演「人類の未来を拓く教育とは何か」から始まりました。続いて「大学と社会のこれから：withコロナ ＆ afterコロナの時代に」というテーマの下で、湊長博プロボスト・次期総長（当時）、稲垣恭子教育学研究科教授、出口康夫文学研究科教授・人社未来形発信ユニット長に鼎談していただきました。

その後、「コロナ禍における京大の教育の現状と課題」というテーマで、山田剛史高等教育研究開発推進センター准教授（当時）より、参加者とMentimeterを使って意見共有しながら、教員調査・学生調査の結果から見えてきた現状や課題について報告しました。最後に、「京都大学の教育のニューノーマル」について、山極総長、北野理事、川添信介学生担当理事（当時）、喜多一情報環境機構長にご登壇いただき、飯吉透高等教育研究開発推進センター長の進行でパネルディスカッションを行いました。参加者の意見に対するレスポンスもまじえながら、活発な意見交換がなされました。

参加者の声

開催後は、参加者の感想・意見をうかがうために、オンラインアンケート調査を実施しました（有効回答数117件、回収率33.5%）。まず、「今回のシンポジウムが教育改善に役立つ内容かどうか」では、約8割の参加者が「とても役立ちそうだ」（39名）「まあまあ役立ちそうだ」（63名）と回答しており、全体として好評価を得ることができました。

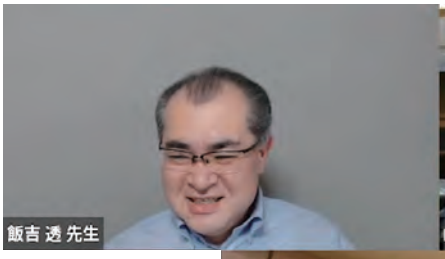
興味深かったプログラムでは、山極総長、北野理事、川添理事、喜多情報環境機構長、飯吉高等教育研究開発推進センター長によるパネルディスカッションのテーマ3「京都大学の教育のニューノーマルとは」が78名、山極総長の基調講演2「人類の未来を拓く教育とは何か」が75名と、ほぼ同数で続きました。興味深かった点に関する自由記述では、「現在の京都大学の教育の問題や今後の展開をわかりやすく説明していただき興味深かった。また、コロナ禍における取り組みの概要・評価や問題点が認識できた。オンライン教育が、学生にも教員にも満足度が高いという点は非常に良いと思いました。」（基調講演1）、「PandAのシステム構築やZoomとの連携について、以前から取り組まれていたことで、スムーズにオンライン教育が実施できたのだとわかった。また、大嶋先生のお話にあった自動音声認識・英語翻訳授業支援システムは完成すれば非常に有用だと思いますので、是非使用してみたいと考えます。」（テーマ1）、「工学研究科で実施されたオンライン試験の情報がありがたかったです。」（テーマ1）、「教員、学生が相互に刺激し合うのが教育だという言葉に刺激を受けた。」（基調講演2）、「京都大学の文化が維持できるような手法は、個人的には非常に良いと感じます。研究室に居つく学生が残念ながら最近は少ないと感じますので、オンラインvs対面ということだけではなく、学生をそうなるようにどう導くかや、様々なセキュリティを緩和する必要もあるかと存じます。」（テーマ2）、「1年生は他の学年に比べ、不安や身体的・メンタル的な不調がでやすいということがわかり参考になった。」（報告とインタラクション）、「理事の先生方がどのように考えていらっしゃるか「肌」で感じることができて、非常に勉強になりましたし、安心もしました。こういったシンポジウム自体も、学生に対する教育の題材になるのではないかと思いました。」（テーマ3）、といった多様な意見が聞かれ、プログラムは概ね好ましく評価されていました。

「今後、このようなシンポジウムを開催する場合に取り上げてほしいテーマ」については、コロナ禍で大学に問われた教育の価値―「京大の教育」「京大らしさ」とは何か―といった原点をもう一度議論したいという意見が多くありました。「今年の続きで、オンラインを含めた京大ならではの教育とは何かを取り上げてほしい。」「教育システムの根本（例えば、大学院を優秀な人材しか進学できない経済的・キャリア的に魅力的な場所にする）の変革が求められていると思う。その様な、大きなテーマを大学全体のイベント（例えばシンポジウム）で問題提起することが大切だと思う。」「教育「方法」にとどまらず、それを下支えしている「哲学」的な議論も活発になされるといいなと思う。「京大らしさ」とはなんなのか、「京大の価値とは何なのか」もっともっと教員が意識していくべきだと思う。」「京大が目指す教育原理、人材養成目的を明確化し、京大らしい教育システム。」などです。

初めてのオンライン開催でしたが、「オンライン参加の方がよいと感じた」（88名）、「（コロナの問題さえなければ）やはり対面開催の方がよいと感じた」（11名）と、概ね好意的に捉えられていました。対面とオンラインのハイブリッド型の開催に関する要望としては、次のような意見が挙げられました。「本日の議論にもありましたが、「ハイブリッド」が大切ではないかと感じました。Mentimeterの利用は、たくさんの「忌憚なき」意見を取り入れられていいと思いました。」「対面は対面の良さがあるのでハイブリッド型がよい。」「この規模だと、オンライン＋双方向性をさらに進めると、対面よりかえって良いかもしれない。」などです。こうしたオンラインでのメリット、対面でのメリットを考慮しつつ、引き続き開催形式・方法も含めて充実した内容になるよう改善を続けていきたいと思います。

当日の詳細な報告書は下記からご覧になれます。

全学教育シンポジウム：
http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/symposium.php



2. 全学教育シンポジウム

プログラム　［司会進行：佐藤 万知　高等教育研究開発推進センター准教授］

午前の部

10:00～　**開会挨拶・基調講演 1：「京都大学の教育の課題と可能性：コロナ禍を踏まえて」**
北野 正雄　教育・情報・評価担当理事、副学長

10:35～　**テーマ1：「オンライン教育の取組と経験を振り返る」**（パネルディスカッション）
《モデレーター》
松下 佳代　高等教育研究開発推進センター教授
《パネリスト》
「PandA “Behind the Scene”」
梶田 将司　情報環境機構教授
「高等教育研究開発推進センターのオンライン授業支援」
田口 真奈　高等教育研究開発推進センター准教授
「オンライン教育の取組と経験を振り返る」
大嶋 正裕　副理事、工学研究科長
「教育学研究科・教育学部の取組と課題」
西岡 加名恵　教育学研究科教授
「オンライン日本語授業の取組事例及び前期授業の検証」
パリハワダナ・ルチラ　国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター教授

12:05～　昼食・休憩

午後の部

13:00～　**基調講演 2：「人類の未来を拓く教育とは何か」**
山極 壽一　総長

13:35～　**テーマ2：「大学と社会のこれから：withコロナ & afterコロナの時代に」**（鼎談・報告）
《パネリスト》
湊　長博　プロボスト、戦略調整・研究・企画・病院担当理事、副学長、次期総長
稲垣 恭子　教育学研究科教授
出口 康夫　戦略調整担当理事補、人社未来形発信ユニット長、文学研究科教授

14:25～　休憩

14:40～　**報告＆インタラクション「コロナ禍における京大の教育の現状と課題」**
《報告者》
山田 剛史　高等教育研究開発推進センター准教授

15:25～　**テーマ3：「京都大学の教育のニューノーマルとは」**（パネルディスカッション）
《パネリスト》
山極 壽一　総長
北野 正雄　教育・情報・評価担当理事、副学長
川添 信介　学生・図書館担当理事、副学長
喜多　一　情報環境機構長
《モデレーター》
飯吉　透　教育担当理事補、高等教育研究開発推進センター長、教授

16:55～　**閉会挨拶**

17:00～　**終了**